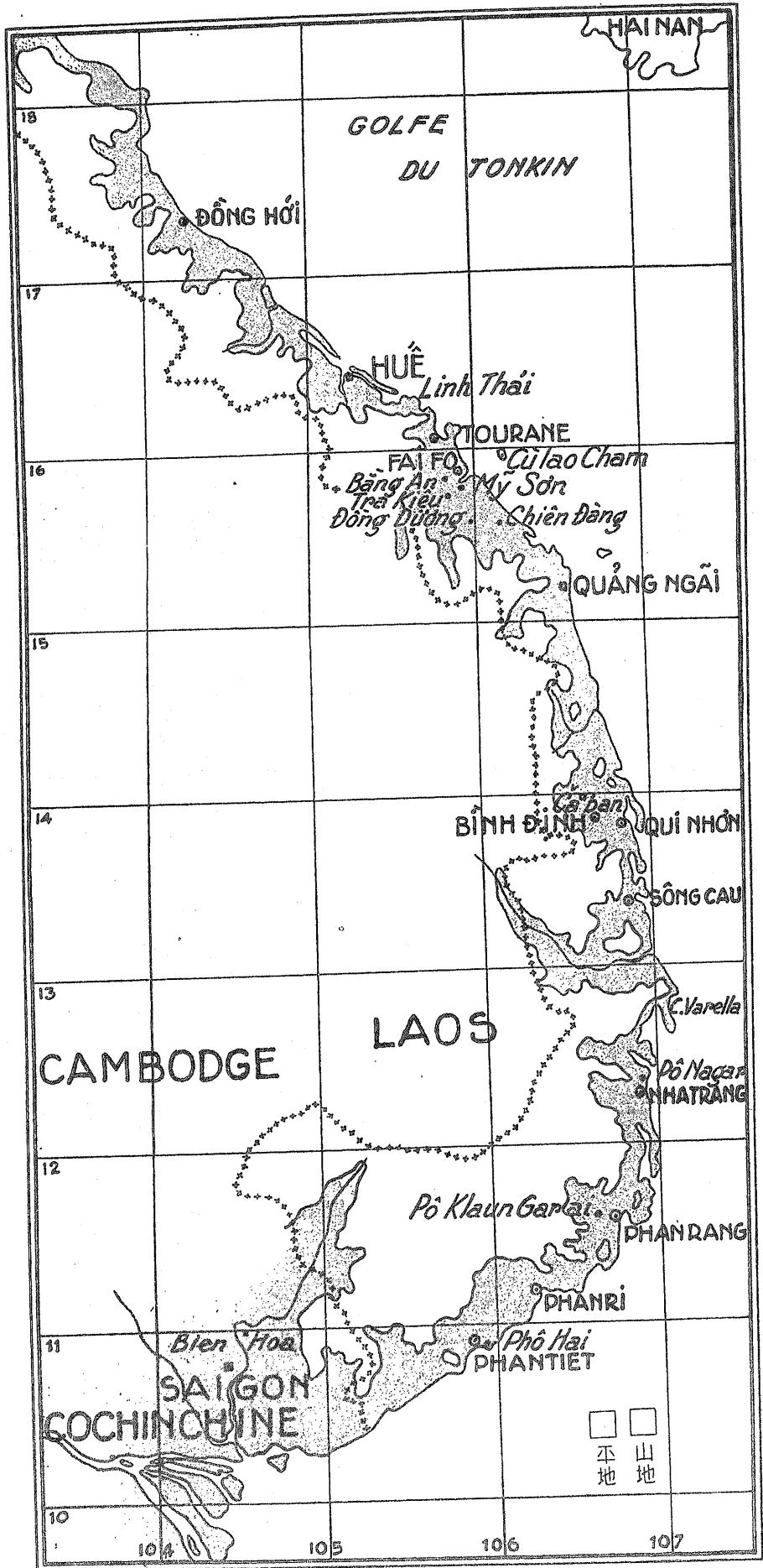


Title	チャムの古塔を訪ねて
Sub Title	
Author	ガスパルドヌ, 嘉津子(Gasuparudonu, Katsuko)
Publisher	三田史学会
Publication year	1935
Jtitle	史学 Vol.14, No.3 (1935. 12) ,p.121a(487a)- 161(527)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	挿繪:トゥール・チャム
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19351200-0121

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.



チヤムの古塔を訪ねて

ガスパルドヌ・嘉津子

序　　言

印度支那半島、順化の古都から南下して行く人々は、その國道が平定府に這入る頃には、やがて彼方の丘の上に、此方の小山の腹に、赤黒い煉瓦の小塔がポツン／＼と立つのに目を惹かれるであらう。大空にくつきりと現れた尖弓形のシルエットは、重々しいゴティックの僧院のやうにも見えるが、近づくと中の空洞があらはに透いて見える。これぞチャム族が遺して行つたなきがらである。何も彼も亡びつくした後の骸骨である。何故

チャムの古塔を訪ねて（ガスパルドヌ）

ならこの塔の中に祭られてゐた神々の行衛を見よ。之を築いた王達、之に働いた工人達の末裔の姿を見よ。その神威も王權も文化も、今やこれらの一 片にさへこびりついてはゐないのだもの。まことにこの安南中部以南の地は、チャム族が、支那・安南・カンボヂヤと四隣の敵を相手に戦ひつけ、一敗地にまみれて死んで行つた古戦場だ。又遙るばると海の彼方から漕ぎよせた印度文明の船が、支那文化の強い潮流に押し流されて去つて行つた難破の跡だ。しかもこの古戰場たるや尙生ま／＼しい。十五世紀の末まで彼等は尙この

地に獨立の王國を占めてゐたのであり、十四世紀の末には一舉遠く東京^{トシキン}にまで遠征して敵を震駭させてゐるのである。こゝ數世紀にして今やその末裔はその數總じて四萬五千といはれ、山間の蕃族等と智能的に文化的に何ら變らない廢頽の姿を晒してゐるのである。民族廢頽の奇らしい一つの型ではないだらうか。

彼等の華々しかりし活躍舞臺、それは印度支那半島の東海岸に添ふ北緯十一度から十八度位までの間の細長い一帶の地であつた。北に東京^{トシキン}、南に交趾支那の豊穣限りなき平野を控へながら、こゝは何といふ瘠せた土地であらう。米を満たした籠を兩端に下げた天秤棒に之を擬する比喩が屢々用ゐられるといふも宜べなる哉。東は南支那海の荒海、西は千古不鍼の山脈山彙。この間に殘された僅かの土地である。時に白銀眼を射るばかりの白砂の砂丘が遠く擴がつて巨岩突兀たる山地につゞ

く。時に海と山とはひた迫りに迫つて道も殘さない。東北のムーソンに見舞はれては激浪小嶼に荒れ狂ひ、南西のムーソンに海和むかとすればそれは却つて陸地に激しい颶風の襲ふ時である。時々この土地を横切る河の流れに添つて、又は屈曲した山褶の谷間に疊まれて、はじめて幾ばくかの青田を見出す。さうしてこれらの河が海に注ぐところ必ず遠く潟性^{ラギューン}となり、又海にまで突入した山並みが、屢々そのまゝ良灣を作る。これが古占城王國大體の地勢である。さればこそ、彼等チャム族はこの瘠せた土地の農業だけに頼らず、之を補ふにこれらの良灣の利用を以てした。即ち海賊である。これは極めて有利な仕事であつた。支那の天朝に入貢する印度、シャブ等諸國の、珍鳥、眞珠、象牙、金、香料などを積んだ船にして犠牲となるもの甚だしかつたといふ。或時占城王がアラビヤ船から奪ひとつた獲物をそのまゝ支那に貢ぎした

が、被害の報既に天聽に達してゐて之を退けられたといふことがあり、彼等の海賊としての悪名は當時廣く聞えてゐたといふ。

その一方、彼等はその境域を擴げること、主として北に進出することを絶えず念としてゐた。言語上の考察からオーストロネジヤ系の民族と目され、初世紀に早くもこゝに占められた印度植民地を降してその文化を吸收したチャム族が、その王国、即ち支那文獻による林邑國を形成したのは漢代の末、武帝によつて布かれた九郡中最南の日南郡、その又最南部の象林縣に於てである。象林縣の境界については、種々の説もあるが、まづラン市の邊り、或ひは雲の峠邊りであらう。兎に角象林縣を占領して林邑國を樹てたチャム族は、更に之を北に進めて、自然の境界ともいふべき今日の「安南の門」^{（ボルド・ダナム）}にまで到ることを初期代々の断ち難き希望とした。茲に於てかの激しい戦鬪が始

まるのだ。絶えず日南九真の諸地方を侵犯刦掠、屢々支那の交趾刺史、太守等を惱まし、爲めに支那軍によつてその城砦區粟やシンハプラの都を擊破されたこと一再ならず、例の宋の檀和之をして、「獲る所異名の寶、勝て計ふべからず、その金人を銷して黃金數十萬斤を得る」底の破壞を行はしめてゐる。十世紀、安南の支那から獨立するや更に之を敵として戰ひを續けねばならなかつた。幾度かその王城も寺院も壞滅に委ね、王自身も屢々捕虜となつた。その他には常不斷の大敵として東埔塞あり、しかもマレー襲來、忽必烈の侵寇、國內の紛亂等、この王國には殆んど寧日が無かつた。この血腥い歴史を繰返して十五世紀間。九世紀の初頭廣南^{（クワンナン）}に都を築いて以來次第々々に都を南遷し、領土を北部から少しづゝ割譲して行つて、終ひに起上れなくなる時が來た。一四七一年、安南の黎太宗自らヴィジャヤの都に攻め寄せて大殺戮

あり、王を虜として連れ去つた。チャム族はその一將に率ゐられてブレラ岬の南に姿をひそめ、爾來その天地をこゝに局限され、安南臣屬の一小王国を認めらるゝこととなつた。しかし乍ら彼等も直ぐにその恢天復舊の望みを失ひはしなかつた。

阮氏鄭氏の鬭争を機として再起の努力も、矢張交趾支那の主^{チュア}、憲^{ヒュンヴァン}王によつて完全に打のめされ、

鐵の籠の中に押込められた王・ポー・ロメは恨をのんで自ら籠の中に命を絶つたといふ無惨な亡國悲話あり、恐らくこの時以來彼等の天地は更に縮小されてファンラン以南に限られたのである。一八二二年、絶え間なき安南人の苛遇にゐた、まれなくなつたボー・チョンといふ最後の王族の一人は、一勢を連れてカンボヂヤに逃れた。さうしてメコンの下流地方に落ついて初めてホツとした態である。彼等は今や盡く回教を奉じて古への面影の見るべきもの無く、又安南に踏留まつた者、即ちフ

アンラン、ファリンの谷間に蟄居する者も、半ばは回教、半ばは古來のバラモン教を信ずるとはいへ、各々厳しい教理や宗規を忘れ、種々な點で兩教混淆し、甚だしい頽廢を示すのみである。

これらの歴史を語るべき史料といつては、僅かにあちこちの神殿に遺された梵文、チャム文の石碑銘だけである。それもその宗教建築物の建立、重修、奉納等に關する記念文で、歴史的事實に至つては全く附屬的に示されてゐるに過ぎない。しかし乍らかかる碑文を遺す王達は、自らその戰功や血統の正しさや智識の深さなどを誇稱してゐるので、一八八五年以來これら碑文の發掘蒐集及び研究に努め始めた佛國東洋學者達は、既にそれで歴史の大綱を立てたのであるが、この貧しい史料は幸ひにして支那安南の文獻によつて補はれるところ多く、この兩方面の文獻を捜索集大成したものに、ジョルジ・マスペロ氏の「占城王

國」がある (Georges Maspero : *Le royaume du Champa*, Paris-Bruxelles, 1928)。

この國と日本との關係をいへば、先づ彼の名を稱する林邑樂がある。しかし乍らこの音樂は林邑より渡來の僧佛徹といふ者に齎されたといふ說よりも、支那を仲介として傳つて來た扶南樂のことであらうといふ說の方が正しいと見られ、それ故林邑との關係は全く無いものになつてしまつてゐる。次にはずつと降つて徳川家康が占城國王に送つた占城名產奇楠香所望の書簡である。近藤守重の外蕃通書に「東照宮賜占城國主御書」、「僧承兌與占城國執事」、「長崎奉行長谷川藤廣與占城國主書」の三通を掲げてゐるが、三通とも奇楠香所望に關するもので、殊に藤廣のは國主以下その夫人、姉妹にまで贈りものを告げて居り、「事々附使者之舌頭」と云つてゐるので使者も來たやうであるが、その便は直接ではなく柬埔寨その他近隣の

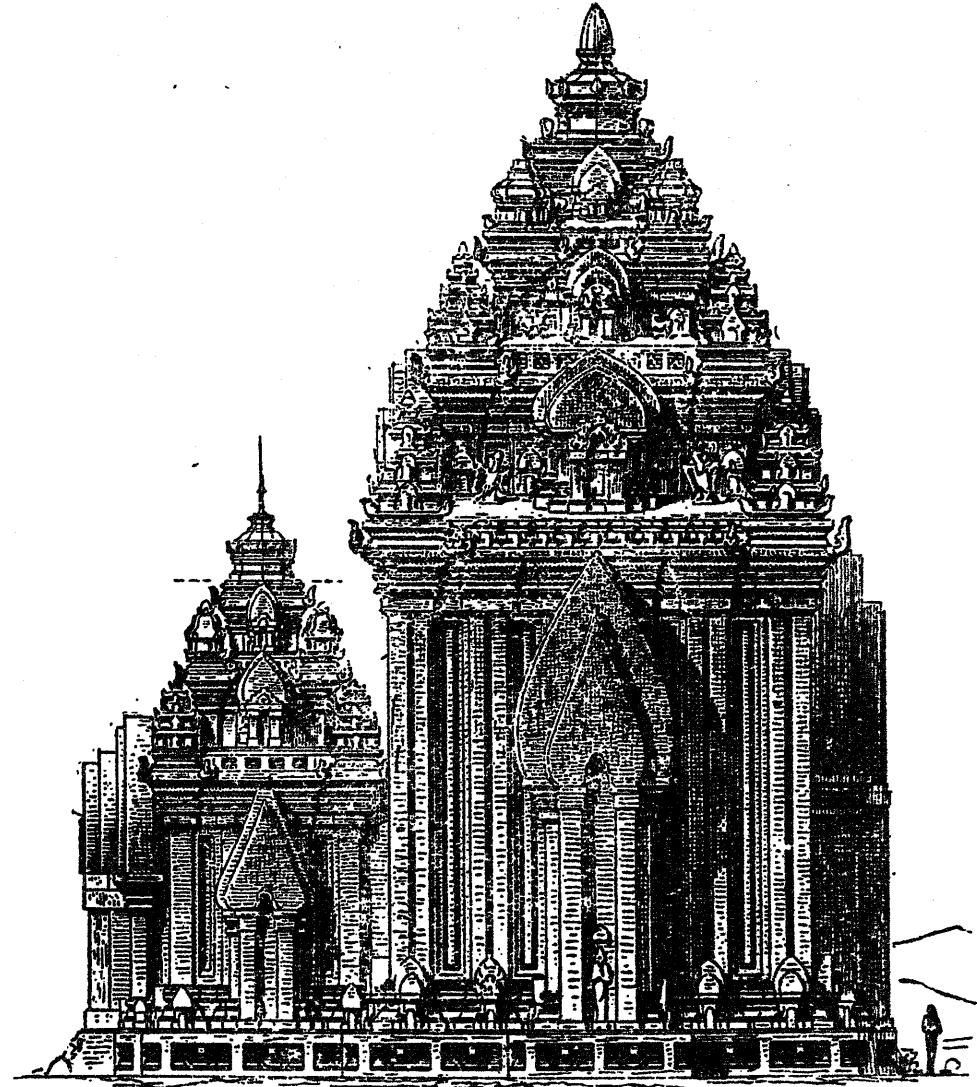
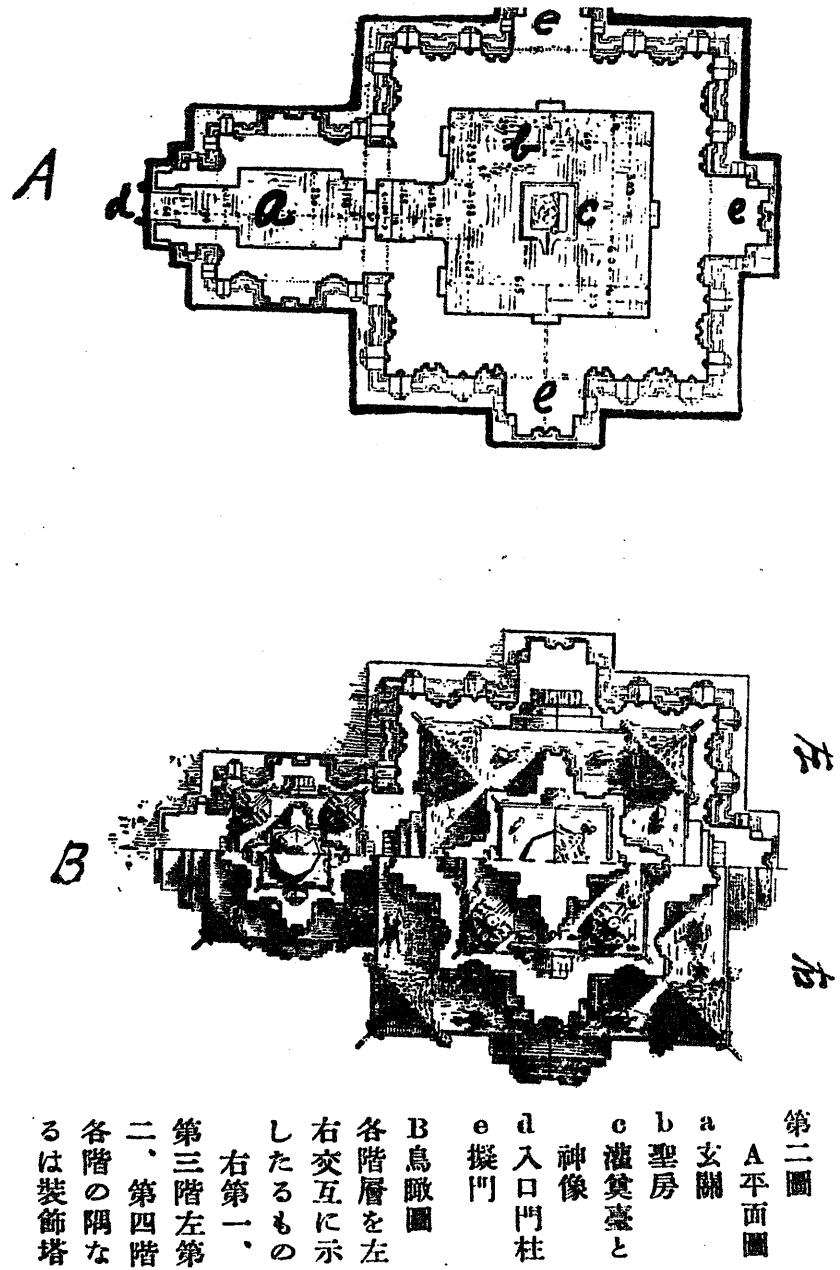
チャムの古塔を訪ねて (ガスパルドス)

便船を仲介として行はれたものゝ如く、しかもそ
れ切りで絶えてゐる。それ故日本の占城關係文獻
は殆んど皆無といつていゝ位であらう。たゞ近く
昭和六年には杉本直治郎氏の「林邑建國の始祖に
就いて」が「桑原博士還暦記念東洋史論叢」中に現
はれ、更に近く松本信廣氏の「チャムの椰子族と
『椰子の實』説話」(民俗學第五卷第六號)といふ、
彼地に於ける植物トーテムの諸例をチャムの説話
の中に示したものがある。その外に坪井九馬三博士
の「チャムの土俗」(大正十一年三月人類學雜誌三十七卷一、二、三號) (後に同
氏著「我が國民國語の曙」昭和二年九月所收) 同
じく同氏の「伽羅の話」(東洋學藝雜誌大正十一年十一月三十八卷四百八十一號)など
がある。同氏の古代におけるチャム民族の日本移
住を論じた諸論文は「我が國民國語の曙」に收載
されてゐる。

チャム族昔日の隆盛をまのあたり語るその遺蹟
の地點としては、無慮二百五十のものが認められ
る

てゐるが、その中完全な形態を示して立つてゐる建築物といつては、凡てバラモン教の神殿及び佛教の寺院であり、宗教建築ならざるものといつては、順化の區粟、その南の茶喬トロキュー以下數個處に指摘さるゝ城址のみ。しかもその多くは、その地形とその邊に殘された土臺石などによつて僅かにその嘗ての存在を肯定出来る位のものである。唯一の遺物たる宗教建築物は、繁簡の差はあれど總て同じプランを踏み、同じプリンシブルに則してゐるので、その最も普通な型として筆者が後に訪問する芽莊ニヤットランのポー・ナガールの主塔をこゝに示して見る。材は幾んど常に赤煉瓦で、その已むを得ざる部分、例へば屋根の飾り、門柱などにのみ石材を用ゐる。塔の入口は常に東に向いて開く。第二圖Bに見るやうに土臺は方形で上部に於てピラミッド形となる。圖の白い部分は煉瓦の壁の厚さでこれに圍まれた正方形の狭い部屋は聖房。この

中には神様乃至リンガが納まれば足りるのであつて、參拜者、奉祀者は中には這入らない。屋根は第六圖B、ポー・クロン・ガライ小塔の横斷面に見るやうに煉瓦を突出アンコルベルマンしといふ形で四面の三角形に積上げ(ポー・クロン・ガライの第二圖参照)、一番上は冠石を以て外部から押へられる。聖房の眞中に數尺の高さの支柱の上に置かれた灌奠臺(梵語 *anānadroni*)あり。神像なり、リンガなりその上にのる。灌奠臺は方形の石の臺で、普通北の方に溝のついた口、即ち樋が突出してゐる。之は神像に灌ぎかけた水を受けて外に出す爲である。この聖房は出口に向つて短い廊下、即ち壁の厚みだけの迫持天井を持つ廊下を持つ。この末には元來扉があつた筈であることは、その高い敷居、煉瓦の鴨居とによつて知られる。之に續くものは外堂ヴェステイビチル即ち玄關の如きものである。以下之を玄關と呼ぶ。非常に低いけれど聖房とは獨立した



面側北塔主ルーガナ・ー・ボンラトッヤニ 圖一第一

各階層を左
右交互に示
したもの
右第一、
第三階左第
二、第四階
各階の隅な
るは裝飾塔

天井を持ち、すつと幅狭く長方形である。

外觀から云へば、聖房の建物は普通四又は五層になつてゐて、その第一層、即ち聖房の外殻を成すものの外壁面は(第一圖参照)壁柱(ピラスター)と柱間(エンターピラスター)とによつて飾られ、その上部は軒蛇腹となり、下部は腰石(スレバスマン)に續くのであるが、大抵上部下部同じ剝形なりその他の形を作つてシンメトリーを整へる。但し腰石の上部、所謂はめ板ともいふべき部分には屢々特別な裝飾、例へば圖の如きハート形のものがつく。之をアブリックといつてゐる。外壁面の四方の壁柱及び柱間は、大抵各々五本宛あるが、その中央のピラスターは入口たる東側にあつては玄關により、他の三方にあつては擬扉(フォース・ポルト)によつて隠れることになつてゐる。擬扉といふものは、玄關の無い他の三方の外壁面に、甚だしく外方に突出して取つけられた純然たる裝飾的部品で、扉に擬へられたものと考へられるのでこの名があり、

兎に角入口の扉に相應じてシンメトリーを整へるものである。之が第一層であるが、その屋根の上、即ち第二層目の土臺の四隅には、極めて縮小された小さな裝飾塔が立てられる(第二圖、C圖参照)。圖は屋根を左右に分け、左右交互に各階の狀態を鳥瞰的に見たものである。第二層はその小さな裝飾塔の中央に、第一層と全然同形にしてたゞ甚だしく高さと大きさとを縮小したものが立つ。第三第四も同じく順次にその大きさを縮小して行く。

四階の裝飾塔も之に相應じて小さくなる。但し第二層以上の擬扉(フォース・ポルト)は擬窩(フォース・ニエーシュ)となつて、その中に神像などを抱く。四隅各層の突端にはチャム建築の特徴たる裝飾片(ビエース・ダクサン)がつく。それは多くの場合厚さ一寸ばかりの平たい石で、之を透し彫風に種々の形に剝つたもので時にはマカラやガルダの如き、印度教特有の怪獸の面になつてゐることもある。これら各隅の裝飾片が、空高くかつさりとそ

のシルエットを描く時、一脈の緊張味を出して、建物全體の何やら鈍重な感じを救ふのである。

次に正面に在る玄關グエスティビュールの建物も、いはゞ聖房の建物全體の縮圖と見られよう。其背面は勿論聖房につづくのだが、その兩側面の擬屏は簡略され、縮小されたものとなり、その屋根の上の層數も少く小さくなる。之についた正面入口には門柱があるが、それは時に圓柱であつたり、時に八角、時に變形もある。こゝまでは、いはゞこの聖房と玄關は一つの建物のやうに各々獨立したものであるが、その次に共通の腰石スープベヤンによつて同一建物となるのだ。この腰石は入口に於て切れて階段となる。多くの場合、形は石の如くであるが、時にはもつと省略された形をとることがある。即ち玄關その他の裝飾部分が省かれるのである。

以上の如き塔を主體として、屢々その兩側、即ち北と南とに、より小さな脇塔が來ることがある

が、大抵は主塔と同じが、又はその省略された様式をとる。一體にチャム建築は極めて小ぢなもので、塔トゥールと呼ばれるのもそのためである。高さも二〇米内外を普通とし、彼のクメール建築に見るが如き雄大壯美のものは見られない。専門的に見たチャム建築總覽ムーエー・ムエー・ムアンの H. Parmentier : Inventaire descriptif des monuments éams de l'Annam, Paris, 1909—1918, 2vols et 2 albums de planches がある。

こゝれひの古塔の主なものを訪ねて親しく杖ひいた日の貧しい印象をこゝに迎つて見よう。

フォーハイ

西貢から國道ルート・ドンダランに添ひ、ベトナムのプランテーション、ラタニエの森などを過ぎて藩鐵ファンテイギョウの町に着く。交趾支那と安南との境から四十八糠、河口を港とし、河に沿つて伸びた町。リヨンクマム

といふ安南醤油製造に聞え、印度支那各地及び遠く支那まで積出す醤油船の往來に賑はふ町であるが、南支那海に真向ふ砂原の上に建てられてゐるので、絶えず海風に吹きまくられ、ありとあら

第三圖 フォーハイの主塔



ゆる建物が砂塵の中に白く埋まり、荳科植物の大木 (*Erythrina corallodendron*) の並木が川に沿つて海へまで眞赤な花を咲き連ねてゐるが、白塵の

チャムの古塔を訪ねて（ガスパルドヌ）

幕の中にぼんやりと霞んでしまふ。砂を投げつけらうそ寒い海風と町中に瀰漫したニョツクマムの辛いやうな生臭いやうな異様な臭ひに、何ともいへぬわびしい氣持になる。こゝから四糸東部の庸^{フオ}諸^{ハイ}といふ人家疎らな寒村の外れ、荒海に臨む断崖の上に三基のチャムの塔を見出す。激しい潮風吹荒んで、その邊りの僅かな草木の姿も枯れぐと風の中に踊つてゐる。裸の草と木を薄く纏つた塔も、赤煉瓦の色を失つて灰色にすがれて見える。

茨に引つかれながら眞中の主塔に近づいて、東の海に面した入口から中を覗いて見ると、ツーンと鼻をつく惡臭、蝠蝠の巣となつてゐるのだ。昔日の祭典の面影淋しく、傾いた灌奠臺の上の小さいリンガは蝠蝠の汚物によごれ、聖房の中まで枯葉が埋めてゐる。カバトンによると、近代チャム人はこの塔をポー・ブジャー・ティック（鼠女王）と呼ぶ神の聖房としてゐて彼の當時まで祭祀が行

はれてゐたものだといふ(註一)。デニラン師の集められた近代チャム説話によると(註二)、これは王國滅亡直後、安南王に連れ行かれたポー・シャー・イノーといふ小王女が、安南王の留守に、弟に當るチャム王の遣はした密使の來てゐることを、侍女の汲んで來た手槽の水の底に見出したチャム王の指環によつて知り、之に連れ歸られ、奇策によつて攻寄る安南軍を伐ち、身はフォーハイの村に退いてこの塔を建てたといふことになつてゐる。この説話が信じ得られるとすれば一四七一年以後故、古塔の中では隨分新らしいわけである。又この塔は古塔中最南端に在るもので、その様式もチャム建築としての特徴を備ふること少く、寧ろ扶南風のものといはれてゐる。成程素人目にも、玄關無く、腰石の上の部分にハート形その他のアプロックも無く、屋根の上の裝飾片も無く、殊に擬屏は、本當に擬屏たる所以を明らかにして、正面

入口にあつた筈の木造の扉の形を真似たものである。この形はカンボヂヤ建築に多く見られた型である。その右斜め前には、かなり壊れた小塔あり、すつと離れて北にもう一基あり、兩方とも主塔よりは大分小さく、茨や雜草に隔てられて近よれなが大體の型は主塔のそれに則したものである。

この断崖の背面には、砂に埋まつて一字の安南寺廟あり、這入つて見ると美々しく飾りつけてあつて、安南寺らしく道佛混淆の澤山の神像神供が並べてある。金、黒、赤の漆の色、五彩の造花が薄闇ながら砂塵にまみれてわびしい。

アンリ

の塔は古塔中最南端に在るもので、その様式もテ
ヤム建築としての特徴を備ふること少く、寧ろ扶
南風のものといはれてゐる。成程素人目にも、玄
關無く、腰石の上の部分にハート形その他のアプ
リックも無く、屋根の上の裝飾片も無く、殊に擬
扉は、本當に擬扉たる所以を明らかにして、正面

らしきものの影だに
見えない。

泡蓮といふ處に、

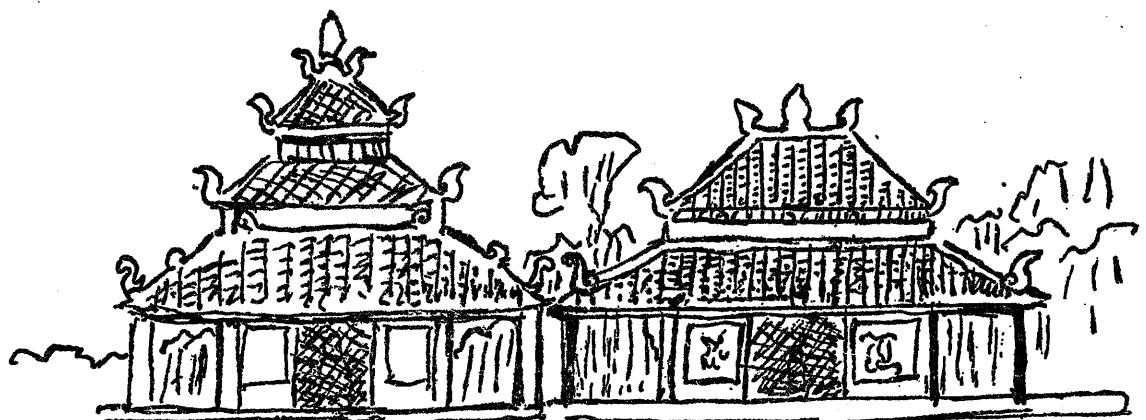
パオゼン

極めて最近發見、發

掘の行はれたる塔あ
りと聞き、その村の
入口に車を停める。

大抵かういふものは
村人が知つてゐるもの
の故、その一人が指
さす方向に向つて野
中を進んで行くのに
二三丁してもそれら
しいものが無い。ふ
り返ると百姓の一老
爺が從いて來るので
之に訊いてみるとど

うも明白りは解らないがどうやら知つてゐるとい
ふ様子に、案内を頼む。多少登り氣味の山林地帶
に入り、幽かな道らしいものを辿つて進むこと數
町、目の前に開けたものは銀砂の谷である。陽に
反射してぎらぎらと照り返へるところ、大雪渓な
ど、いふものに似てゐるのではないかと疑はれ
る。ズル～と引き込まれ勝ちの足を懸命に運ん
でやうやく之を渡る。この先是葉の無い枯れたや
うな低い灌木の疎林で、砂っぽいでこぼこの土地
は乾き切つて眞白だ。處々、木の根に大きな土の
塊や巨石などが見えるばかり、見渡す限り同じ疎
林の擴がりである。黙々と先に立つ老爺に従つて
歩を運ぶに、行けども行けども塔らしいもの無し。
二月の初旬といへどこの南國の太陽は、日本の土
用にもまして灼きつけ、その暑いこと限り無し。
今か今かと兎に角進んで一里半も歩いた頃、やう
やくそれと指されたものは、疎林の中の大きな自



第四圖 パムンファンリのバムン

然石の一群れ。さうしてその上に建てられた見るも哀れな小祠であつた。がつかりして物も云へない。我々の不服さうな様子に、老爺が更に案内するのに従つてこの巨石の間に這入れば、その奥の窪みに少しばかりの濁つた水溜りがあり、身を躊躇めた彼は之を手に掬び、靈泉で、もあるかのやうにごくごくと音をたてゝ飲んだ。岩の上の祠は養蜂幽位の小さなもので、立消えた線香が茶碗の中に亂れてゐるばかり。再び勇を鼓して歸る。葉の無い疎林には陰らしいもの一點だに無く、陽はぢりくと照りつける。熱しきつた銀砂の谷も無我夢中で渡り、やうやく森の中に這入つたかと思へば、今度は火田耕作の山焼きの炎と煙とに包まれ、實に火刑にあふ心地、腹を立てる力さへ無くて車に歸る。斯くてチャムの塔は見損つたが、後で考へて見れば、圖らずも荒野の奥の有様を見、安南人の巨石崇拜の一例を知つた。まこと、二里

も人里離れた林の中のこの巨石は、尙遙るくと詣でる里人の祀りの線香を受けてゐるのである。

やがてソン・ルンの河に沿ふ潘里(ファンリ)の谷に着く。

この谷と、山を越えてその北に續く潘郎(ファンラン)の谷間とは、安南に臣屬して以來、一八二二年の、少し大袈裟な云ひ方かも知れないが國家解體まで、占城國最後の領域であつた。又、その末裔の一部が、逝ける光榮の廢墟を抱いて隠れ住むのもこの二地方である。その爲、他省には見られないチャム族近世の建物が多い。この邊り、右手には白い砂丘が果てもなく延び、左手には岩石あらはな荒涼たる裸山が續く。稀れに見える人家の圍りにさへ青いもの、見えない寂しさ。時としてひよろくの芭蕉の一本二本、又は小さな瓜もの、苗らしいものが砂の中に埋まつて哀れな苦屋を飾つてゐるのが、却つて慘め臭い。これら砂山の陰に隠れるチヤムの村々には、古への煉瓦建築を續ける力を失



第五圖 トゥール・チャム ポー・クロン・ガライの主塔

つたチャム族が、安南風の廟の中に、神化された
近い頃の王達の半身像やクットと呼ばれる王族の
墓石などを納めて祀つてゐる。屋根を支那瓦で葺
き、壁や柱は全く安南式に石灰で塗り彩つたもの
で、煉瓦の古塔と區別してバムンと呼ぶ。さすが
チャム建築の特徴として中央の主な部分は二層、
稀れに三層とし、各層の屋根の隅々には木片を以
て、例の裝飾片の取つけてあるのが僅かに昔日の
盛んな建築の面影忍ばしむるのである。

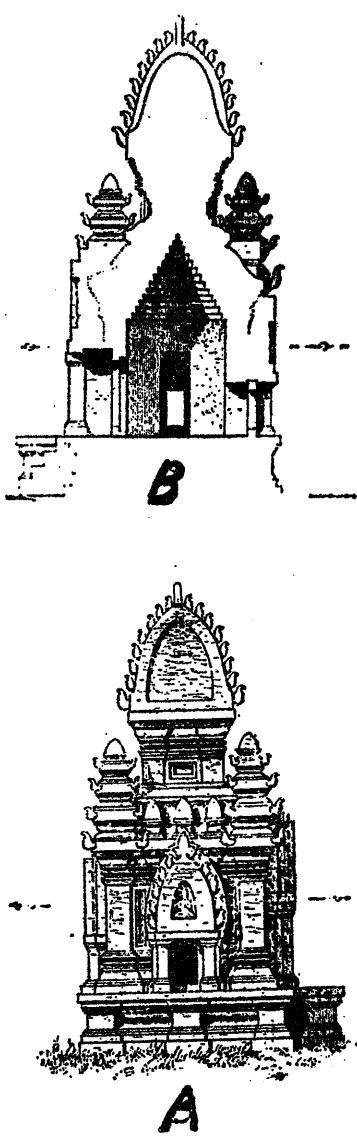
古への印度文化の發生地パンダランガの名残を
示すパダラン山彙が右手にわだかまるので、道は
暫くの間左右に山を見て進む。萬目荒涼。灼熱の
太陽に焼かれた道は、たゞ白塵の集積である。

ポー・クロン・ガライ

斯くしてファンランの町に着き、それより五糠
西に外れて俗にトゥール・チャムといふ名で呼ば

れる小さな町に至る。その後ろの小丘の上にポー・
クロン・ガライの塔が四基立つてゐる。ごつゝ
した岩と茨に包まれた小山の上の主塔は、チャム
建物の特徴豊かに、各層四隅の裝飾塔の線が明瞭
りとして、如何にも派手やかな塔だ。その塔の前
方に二基の小塔が重なつて立つてゐるが、これは、
第一のものは祭禮に際して神火を燃すところ、第
二のものは祭禮の後に必ず行はれる聖餐の爲に用
ゐられる塔の由。道の無いこの岩山百米ばかりの
ものを逼ひ上つて主塔に到る。玄關の欄間ランバンの凹み
には、六本の手を上げて踊るシワ神の浮彫鮮やか
に、二階三階の同じ凹みには顎鬚の長いバラモン
徒の坐像がはつきり見える。玄關に這入ると、其
處にはナンディンと呼ばれるシワ神の乗用たる牛
の像が控へてゐる。その奥、即ち聖房との境には
厚い木の開き戸が閉ざされてゐる。さしてある釘
を抜いて之を明けて見ると、先づブッと蝙蝠の強

い悪臭が鼻を襲ふ。暗がりの中をくつきりと白い人面が浮ぶ。よく見ると中央、灌奠臺の上に据えられた大きなリンガの前面に、取りつけられた彫刻の人面に彩色が施してあるのだ。皮膚は眞白に、鬚は眞黒に、唇は眞赤に。これはムカリンガといふ特別な型のもので、その意は面のついたリンガださうだ。しかしこの色彩は又何といふ甚だしい悪趣味であらう。この塔は安南に留つたチャム族の手に、唯一つ残された古塔で今以て此處に昔ながらの祭祀が行はれ、その度にこの面はその神官等によつて眞面目に彩られるのだといふ(註三)。こ



第六圖

A ポー・クロン・ガライの前 方の 小塔
B 同じくその横断圖 (パルマンチエ氏による)

等皆王の属性を示すものである。その結果、今や廢頽したチャムの末裔にあつては、その爲に建て

の塔の入口の柱及び玄關と聖房との間の柱には細かく彫りつけられた銘文が見えるが、之によると、この塔は十三世紀、ジャヤ・シンハヴァルマン三世に依つて「ジャヤシンハヴァルマリンガシュヴラ」に捧げられたものであるといふ。昔から神殿の建立者たる王は、己れの名を神の名につけていちいち新たな神體を作る、といふよりも、己れを神に一致せしめる。例へばバドラヴァルマンはイシュヴラ神を祀つてバドルシニヴラと呼び、之を重修したインドラヴァルマンはインドラバドルシニヴラと呼んでゐる。故にこのリンガ前面の顔はシヴの面であると同時に王の像でもあり、その鬚、その冠

た主たる神の名は忘れてしまひ、從といふべき王の方に對する祭祀を續けてゐる。現にこの塔に於て、祭司はこのムカリンガを祀つてはゐるが、彼等にとつてこの石は既にシヴではなくしてポー・クロン・ガライといふ王の姿に外ならなくなつて居り、この塔もポー・クロン・ガライといふ名で呼ばれてゐる。この意味に於て彼等の昔ながらの印度教なるものは、その外形だけはどうやら保ちながら内容に於て變化してゐる譯であらう。

ポー・ナガール

これより山裾に添つて行くこと百餘糠にして芽^{ニヤツ}莊の平野に出る。植えつけの濟んだばかりの田の面が燦やかに青々と擴^{トラン}がり、ソン・カイ河の海に注ぐところ、穏かな瀉^{ラギ}性の波の中に緑の小島が二つ三つ浮ぶ。蕭條落寞たる荒野荒山を越えて來た目には、こゝはまことに穏かな美しさだ。これこ

そ初世紀、印度の植民地が初めて形づくられたといふニータラの地。ヴォ・カーニュと呼ばれる印度支那最古の梵文碑の現はれたのもこの地である。町はこの河の南岸に擴がり、河向ふに立つ小丘の縁の中にポー・ナガールの塔が聳える。登つて行くと右側には石の圓柱の列が、半ば崩壊の形で立つてゐる。そのかみ、恐らくは屋根を持つた堂廊であつたものであらうといふ。次に幅の狭い階の高い石段によつて頂上に達する。前側に三基の塔横列し、背後に二基礎石が残つてゐる。前側中央の塔は、チャムの塔に稀な非常に地味なもので、何の裝飾も無く、階層の無い屋根はすっぽりと丸みを帶びたピラミッド形で、玄關、擬扉の屋根は、聖房の屋根にシンメトリカルに、同じ様に丸味ある三角形といふか、ハート形といふか。外壁面にはピラスターにまがへて淺い彫りが入れてあるばかりだ。これは八世紀、マレー海賊の爲

に焼失した塔の跡にサチア・ヅルマン王によつて再建され、ムカリンガを置かれたものを、更に十三世紀に到つてジヤヤインド

ラヅルマ

ンが重修

を行つた

もの、

由。這入

つて見る

と、内部

は真闇で

矢張蝙蝠

の悪臭に

包まれ、真中にポツンと土間に直接置かれた石は、リンガではなくしてどこかの塔の屋根の上の冠石



第七圖 ニヤットラン ポー・ナガルの石柱
塔はこの上に在り（第一、二圖参照）

である。

その右手の主塔は、圖に見るやうな壯麗なもの。一階、二階の屋根の上、裝飾塔の傍らにはブラー・マ神の乗物たるハンサと呼ばれる鷲鳥や、象の姿が見える。玄關に這入ると入口に粗雑な石の象の坐像があり、その頭の上には金や紫の色紙で冠がかぶせてある。聖房との境の欄間には黒漆の額が奉納され、「蕩浩恩娘」とあり。奥を覗くと強い線香の匂ひが紫色の煙と共に顔に吹きかかる。水色絹の服を着た二人の安南女が、こちらに背を向けて神前に額づき、ガチャ／＼音を立てゝゐるのは神占の例の竹箸のやうなものを動かしてゐるらしい。今や安南人信仰の寺と化したこのチャムの塔は、さすがに清掃されて蝙蝠の影は無い。やがて神託を得た二人の女が出て行つたので、入れちが場末のカフェーの入口などで案内の指を示して立

つてゐるあの断髪洋装の少女の木製人形を二體、神前のに立てる香爐を持たせてゐるではないか。神像を見ると、安南風に赤帛を以て盡く纏ひ、前には種々様々の盛物をのせた供物臺を置いてあるので像の姿は見るに由もないが、たゞ兩側面から出でる六本の手に僅かに神像のウマ神の面影を知るばかりである。この神壇を中心に狭い房の内には左右に道教の神々を祀つてゐる。日本の輸出向きの、紛ひ薩摩の花瓶や茶碗がこれらの神前に幾つも並んでゐる。これがボア・ナガールの變つた姿である。

この塔の裏側にチャムの古碑と並んで一基の安南碑が立つ。この神の安南名前「天依阿那」女神に就いての傳説的縁起を記したものである。この説話には元來二種あり、多少の出入はあるが兩方とも女主人^{ホイシ}公がダー・ナム又はボア・デーブル（鷲の木）といふ木の力によつて海を渡り、その夫と

なる者にまみえ、又その木によつて歸つて來るといふのであつて殊にこれが近代チャム人にとつて最高の神の傳説だけに、松本信廣氏所論の（既掲論文参照）チャム説話に於ける植物の重要な役割を示す一例となるものであらうかと思ふ。斯くてボア・ナガール女神は、大地と米と共に鷲の木の創造主と見做されるのである。ところでこのボア・デーブルたるや、チャム族にあつては全く神聖視されてゐて、この香木の採集に當つては、先づその採集隊は、ある特定の村の特定の「鷲の木侯」

といふやうな役目を有する村長によつて指揮され、その出發の前に神官等はファンランの谷間に在るあらゆる聖房に犠牲として山羊、米、卵、粥などを捧げる。これが濟んで採集に出るのであるが、その間中、無言の行を守らなければならぬ云々（註四）といつたやうな難かしいもので、之を規則的に贈られて來た安南の方でも、貰つた時に

は神に供へて祀つたものだね。餘談に亘るが、かの徳川家康が斯くも執心した棋楠香とは、此の木である。チャム語ではナを Gahlāu

も大體之に似たことを以てゐる。その植物學上の名前もそのナ *aquilaria malaccensis* であつて依然鷺である。

Gahluu と呼ぶ、チー語の Gaharu チャンスクリッペの agaru 等を語源とする。島ち故藤田豊八氏が夙にその「島夷誌略校註」又は「狼牙脩國考」の中に出て居られるやうな Gharu-wood である。

安南人は之を *trần huòng* 島ち支那式に沈香と呼び慣はして來た。然るに歐洲人は何故之を鷺の木などと呼んでやうになつたか。それにアカベーンは例の “Nouvelles recherches sur les Chams” の中で、恐らくは最初どこの香木を商呂として扱つたボルトガル人が、アラムト語の Malayālam agila を *pao de'aguila* とし、その aguila を aquila から “bois d'aigle, eagle-wood, adlerholze” となつたものならしくいふのである。當を得たものであらう。但ヨーロッパ・シヨーパン英印鑑書

「天依阿那」といふ名前を以て祀られてゐる女神は順化^{ユエ}を中心にその邊り一帯に非常に多く見られるといふので、恐らくは古代チャム人は順化の在る承天省方面でも同じウマ神の崇拜を盛んにしてゐたものであらうといふ(註七)。いづれにせよ、安南人が自分の征服した弱小民族の神をそのまま崇拜してゐる一例である。

テュイホア

こゝを出て再び北に向ふ。山に追ひつめられて海に近づく時は、南浜の空飽くまで青く、マンゴローヴ樹の低林に蓋はれた海つゞきの沼地の擴がり、又は海岸の椰子の並木、太古からのであらう鹽田などが見え、山退く時は砂丘に岩石壘々たる荒地が續く。山と海との絶え間無い交錯。變化の多い眺めである。愈々パンダランガの谷を北に限るカップ・ブレラにかかる。高く海に臨む山の裾、

チャムの古塔を訪ねて(ガスパルドヌ)

辛うじて車輦の幅に足る程の道を縦して迂回曲折。次第に登り行く岩根は、終ひに海上に屹立すること七百八米。峯を仰げば「ブレラの指」(ドア・ド・ブレラ)と呼ばれる頂きが、遙か雲の中に指さして、まことに此處ぞ天然の關門である。目の下にはダン・ロー湾、前にはテュアン・レーの岬が長々と延びて果てしなき蒼溟を限る。南歐のコウト・ダ・ジユールに比べて賞でらるゝ所以であらう。登り四糠、下り二糠のこの險所を出づれば、川の流れも多く、從つて稻田の綠もコ・椰子の林もあちこちに散在する。ソン・ダラの支流にかかる一糠七五米の大鐵橋を渡ると綏和^{テイホア}の町で、傍らの丘に一基のチャムの塔あり。草を分けてだんく登つて行くと先づ安南の廟「敕上頂廟」といふのが見え、盛んに線香の匂ひがたゞよふ。塔はその背後に立つてゐるのだ。昔在つたであらう玄關も入口も崩れて、神祕なるべき聖房の口は廣く明いて

全くの伽藍堂である。煉瓦の色もさびてゐるが、二層三層の裝飾塔は尙鮮やかに空に描かれてゐる。この小山は尙廣く背後に延び、あちこちに落ち散つた煉瓦が、嘗ての日こゝにもう一基立つて

第八圖 テュイホアの塔、背面



暇無くて先を急ぐ。道はヌイ・チャブ・チャイの山裾を縫ひ、幾つかの峠を上下し、亭々たるコ、椰子の深みどりに埋みつくした瀧沫^{ソンヨウ}の府を過ぎる。再び登り道にかゝつて後を見かへれば、綠した、るばかりのコ、の叢林が土地の起伏に従つて波打ちながら遠く擴がる。見事な眺めだ。それから巨岩峨々たる山の裾を周り、椰子や大きな仙人掌に彩られる海邊を廻つてやがて奥深い山地に入る。

上下曲折幾度。深い溪谷を隔てゝ向ふ山の高い岩根の間から一條の白い瀧が木立の下に著るく、末は靄の中に消えてしまふ。この山は、一四七一年の決戦後逃れ行くチャム族の背後を守つた屏障であり、今や富安省^{フニン}とその北の平定省^{ビンディン}とを境してゐる。岩石多き谷間や森を通つてやうやく歸仁の平野に出る。

ゐたことを語る。この丘の下の洞中にバドラブル

マン一世（四世紀末）によつて立てられたシヅ神への碑が見出されたさうであるが、それを尋ねる

この邊り、既に山々遠く退いて豊かな稻田が或

ひは黄金の波を打つて刈入れを待ち、或ひは植付けを終つた苗が青々と息づき、或ひは刈入後の黒々とした土を耕してゐる水牛の群れあり。

歸仁(キニヨン)の町に入る三糸手前の平地に二基の塔見える。

瓦色蒼然、二基とも下部の方から外側の瓦が落ち、擬

扉のハート形も半ばまで崩れてゐる。型としては

殊に上部の、屋根の部分に異色がある。例の階層

を成さず、之を飾る小塔や裝飾片が無いので、ボ

ー・ナガールの中央の塔と同型と見做し得るであ

らう。彼にあつては屋根が全部のつべらぼうであ

つたが此に於てはより強い丸みのピラミッドを成

して居り、之を五段に分つ横線あり、線上各段が

淺い窩(ニシユ)を幾つか抱いてゐるといふ感じである。こ

こも雜草の茂み深くして近よれない。背後に安南の小祠が見える。

ひと時雨來て、初めて今までの乾いた眞青な南

チヤムの古塔を訪ねて（ガスパルドヌ）

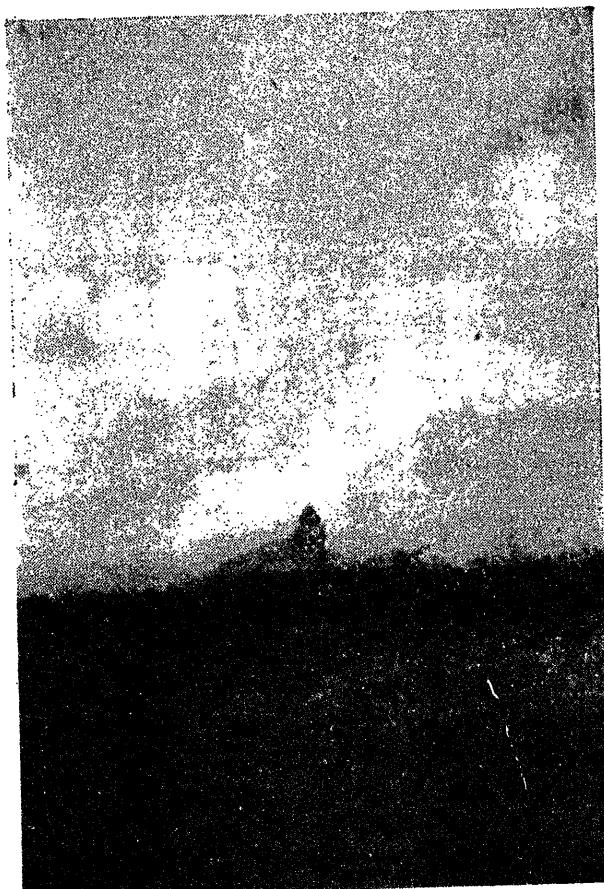
第九圖 ピンティン錫の塔



國の空に別れたことに氣がつく。進んで行く向ふの空はどんよりとすつき雲に閉ざされてゐる。

更に進めば右手に二基、左手に一基、やがて又右手に三基、各々その寂然たる姿を丘の上に晒してゐる。最初の右手の「玉の塔」、次の「銀の塔」など、共に「鐵の塔」と呼ばれる左手の一基を訪ねて見る。畠の間を越えてやゝ高くなつた一劃の

第十圖 ピンディン鐵の塔の遠景



第十四卷 第三號 (五〇) 一四二

王國滅亡の日までの王居の地であつて、その蒙れる戰禍の數も最も多かつた筈である。その間、これらの中は何といふ多くの悲活劇を眺めて來たことであらう。——多年に亘るクメール人の侵占、忽必烈の入寇、安南諸王の攻撃、さうして王國最後の悲運の姿など——

平定^{ピンディン}の町はすぐそばで、安南の古城壁が嚴めしく圍つてゐる。こゝから數町行つて、最近（一九三四年）非常に豊富な發掘の行はれたタップ・マムといふ村にその跡を訪ねる。丁度かの鐵の塔から正北に當り、その北邊の城址からは三百米、畑や田の畔を傳つて奥に入ること數町、やゝ小高くなつた平地に巨大な塔のあつたことを明示するやうに、砂石の巨材が横はつて居り、煉瓦の壁面が地下數尺に露出してゐる。こゝに發掘された多くの收穫物は、極めて安南風の加味されたもので、チヤバントンヤム藝術としてそのデカダンスは明らかである。

それと肯かれる。このヴィジャヤは、閣槃城^{チヤバントン}と呼ばれ、十世紀の末インドラプラの都が陥つて後、

塔も十三世

シェンダン

紀以後のも

のと推定さ

れ、恰もク

メールの侵

占時代を含

んでゐるの

で、素材な

どにカメー

ルの影響が

見られる

が、恐らく

その手法の

未熟からこんなに早く崩壊してしまつたのであら
うといふ(註八)。しかしそのお蔭で埋藏物が豊富だ
つたともいへよう。



第十一圖 タップ・マム發掘の跡

こゝより更に道を北に續ける。山々は遠く紫に、
豊かな平野には稻田とコ、椰子の林が續き、水邊
の水牛の背には白鷺がのどかに遊ぶ。それもやが
て再び荒野となり、谿に降り、チュオン・ホア峠
にかかる。この邊り自然の巨岩山々に満ちて、時
にチャムの塔をさながらに高く空に屹立するもの
がある。この峠をおおりると岩のたゞまひ美しい
海である。荒野と海に狹まれた道の邊には、桃色
の日々草の花がどこまでもどこまでも咲きつづけ
る。コ、の林を抜け廣儀の町を越えて六十數秆、
三技の邊りに立つといふ塔を見過ごし、旃檀とい
ふ處にて、道路から數町烟の中に這入つて三基の
塔を見る。盡く草木に蓋ひ包まれて煉瓦の肌も見
えない。いはゞ三本の太く生ひ茂つた木である。
少しの透き間から身を入れて南方の一基を窺へ

ば、塔の前方全く崩れてがら空きとなり、無くなつた天井から榕樹が長く氣根を塔の中に垂れてゐる。十三世紀の王ハリブルマンの立てた碑がこの中のいづれにかかる筈ときけど、他の二基は全く樹木に密閉されて這入る由も無い。

ドンチュオン

こゝから二十糠にして道路を西に切れ、更に九糠田の中を進んで桐陽^{ドンヂュオ}の廢墟に着く。この廊内に立つ碑文に依れば、十世紀インドラヴァルマン二世が、毘盧遮那佛の加護の下に建てた佛教の僧院といひ、他の印度教の聖地に比べて遜色の無い立派な規模結構を持つてゐる。入口の雜草に蓋はれた泥沼は、そのかみこの聖域の淨池であつた。木々の茂みに包まれた甚だしい廢壊の中にも、中央のあり、左右の屋根を失つた塔の中に石像が二

體ながら斜めによろめき立つてゐる。そこを出て苔の敷石を踏んで行くと、道をはさんで左右に四角い塔柱が數基ならぶ。嘗ての日、或ひは屋根を持つた廊堂であつたらうと思はれる。次に再びかの入口の塔門と全く同じやうな崩れた中門現はれ、兩側には同じく石像が仆れてゐる。石段を上つて近よつて見れば、一はマカラを踏まへ、他は牛を押へてゐる。前の二體と共に四天王であらう。この後ろに支柱と腰石だけを残した一堂あり、這入つて見ると正方形の房の一隅に、無殘や首の無い大きな石の大佛が斜め向きに坐つてゐる。しかもその像の姿は如何にも美しいのである。この房を出て、階段の跡らしい土の起伏を上下して再び屋根の無い、外壁も半ば以上失はれた堂に入る。チャムの塔として、嘗て見ない廣さ、三間四方もあるらうか。これだけの廣さを包む塔の完全な姿はどんなに大きなものであつたらう。これら崩れた

塔の外壁面に残る壁柱・柱間の複雜極りなき凸凹

ピラスター
エンターピラスター

の群像などがある。

や、擬扉の精緻ともいふべき唐草文様の浮彫など

は、さながらありし日の壯觀を忍ばしめる。この

堂を後ろへ抜けると、チャム文石碑が三基ごろご

ろ立つて居り、更にその後ろには、この東西に延

びた建物の群れを劃するやうに卒塔婆と見える環

型の浮彫ある圓柱が七八本づらりと南北に横列し

てゐる。その背後はずつと低地になつた畠である。よく見るとその畠との境には、明らかに煉瓦

の善美に飾られたる都。白蓮に燐き、最も美しき蓮花に飾られ、云々」といふ文句は、この聖地の

建てられたる爲に愈々その燐きを増した都の様を語るものであらう。この廢墟を捨て、國道に戻る。この邊りチャムの遺蹟最も豊富なれど、割愛して

十一糸の道を急ぐ。

ト ラ キ ュ 一

の圓柱の極めて高いのが二本、木の茂みの中に聳えてゐる。苦に青づんだ土を踏んで境内を歩いて

見ると、以上の建物の他に腰石だけ残つた小塔があちこちの隅に見え、その残つた外壁面の込入つた浮彫の中には、印度教の面影も見えて多く天人

再び西に切れ、竹籬の間に隱見するテュー・ボン河に添ひ、その河添ひの村々の間を過ぎて十六糸、茶喬トラキュー
デウダの遺蹟に着く。河の西方に擴がつた一區

の平地がそれで、その中央に地上一間位の高さに瓦壁で築かれた一劃の土地こそインドラ・プラの城址の一部だといふのである。露芝を踏んでこの上に登れば、更にその中央と見ゆる邊りに、瓦壁によつて高くなつた方五六間の土地あり。瓦壁面におぼろげに見える浮彫の様々な形は、何か天人^{アヴァダ}群像のやうでもある。發掘の跡があちこちに深い穴を残してゐるが、それさへもすつかり芝草に掩はれてしまつてゐる。「不知何王殿」、何となく口に出て來る。今まで見て來た建物は、皆冷たい石の神々の住居であつた。その爲か廢墟といふものゝ持つ悲しさや懷しさは少しも感じられなかつたが、今此處に來て初めて何となき人間的な感情の動くものあるを覺えたのである。水經註の林邑國都「典沖」の描寫が、この地の地勢に全く符合するといふので、今こゝはインドラ・プラの址と認められてゐるのであるが、周圍全く民家に建込

まれ、僅かに殘されたこの猶額大の城址に立つては、「城周圍八里一百步、甌城二丈」といふやうな都は寧ろ想像し難い。たゞ「板上層閣、閣上架屋、屋上構樓、高者六丈下者四五丈、飛觀鴟尾、迎風拂雲……但制造壯拙……」といふのは、ゴテーと込入つた裝飾の華やかさと規模の稚拙さを述べた、まことにチャム建築の眞面目を喝破したものといへよう。扱て、この背後に民家を隔てゝ小山あり、嘗て一塔の聳ゆるものありしが、今やその塔の材をそのまま用ひて、カトリックのお寺が出来上つてゐる。バラモン教の塔から——何といふ變遷であらう。こゝをおりて、來た道に戻らうとすると傍らに堆く山を築いて積んではいるのは、煉瓦の破片や神々の腕や足や、さては天人の頭やマカラの面や等々、嘗てこの邊りを飾つたエレメントの集積なのだ。しかしさすがに一片たりとも持去れば處罰するといふ意味の印度支那總督府の制

札が、これらの石塊を路傍の礫と區別してゐる。

ミソン

この細い道を更に西へ、耕された平野の中に進めて行くこと九糠、愈々「王の谷間」と呼ばれる聖地美山に向ふ。土地は次第に高くなつて行つて、清い小川を渡れば、この長い旅程の間、常に西の方に斯くも蟠踞してゐた山々の群れは、今や身近く迫つた感じである。「番人を呼べ」といふ立札に従つて車を停めると、早速番人が飛出して來る。此處が「王の谷間」へ最も近い美山の村である。番人を乗せて、木立の少い緑草の高原を更に山々の根に向つて進むこと十糠。愈々徒步となつて、徑はすぐに深かくと繁みの中に這入つてしまつて、そのせらぎさへも聞ゑなくなる。岩傳ふ雨や清水の穿つて呉れた徑であらうか、それは

岩と岩との小さな凹みを辿り行くのである。身を蓋ふ茂みの絶え間から仰がれる山々は、時々見舞ふ小雨に翠いよ／＼鮮かに、邊りの茂みの中には名の知れぬつゝじのやうな牡丹色の花が無數に咲き亂れてゐる。人里離れたこの山の中にも、薪負ふ小娘に遇ふかと思へば、遙か向つ山の腹のあたりには牛追ふ男の姿も小さく見える。山の褶に従つてぐる／＼曲り／＼、しかも次第に登つて行くこと二糠ばかり。ふと山の端を廻らうとする鼻の先にニユツと水牛の顔が突出る。近くの山澤に遊んでゐたのであらう。やがて徑はやゝ下り氣味となり、あちこちに沼が見え、かの溪流の源であらう、緩やかな小川が通る。橋の無いその小川を、先達の番人が造つて呉れる石の危い足場に従つてやうやく渡り、更に數町。遠く左手の深い叢の向ふに例の赤煉瓦の塔がやら上半身を現はす。やがて右手の丘に又一つ。さきの小川のうねりを更

に渡つて愈々美山の中心地に辿りつく。一望凡そ二十基もあらうか。直徑十町ばかりの圓の中に、小川を中にはさんで西と東に立つてゐる。まことにこれこそ一幅の美しい靜寂境。厚い山並が南からぐるつと之を立圍らし、その山の背後を遠く走るテュー・ポンの小さいく、支流が、かの小川となつて静かにこゝを南から北へと霧ほして行く。

峯に横たふ雲が少し動いて、思はぬ高い處に山頂を現はす。叢は深々と高いが、立木の少いこの谷間には、小鳥の來り鳴く聲さへ聞ゑない。ほのかに淡紅の小花を一面に撒き散らして、足許から遠く擴がつた合歡草が、我足音にさへ驚いたかのやうに、サツと葉を閉ぢてしまふ。宗教的冥想の爲には、何と優れた地であらう。先づ川手前、即ち西側の建物の群れを訪ぶ。二基の塔が、南北に並んでゐるが、兩方とも普通の塔の正方形であるのに比し、かなり長目である。ひどく荒れてはゐる



ミツン山寂境一部圖十二

凸、その間
擬門の凹
間の窩に納

まる神像の群れなど細かな技工は、チャム建築として最も優れたものゝ一つであらう。それよりも西側の建物の群れを訪ぶ。二基の塔が、南北に並んでゐるが、兩方とも普通の塔の正方形であるのに比し、かなり長目である。ひどく荒れてはゐる細長い建物である。その長い側面は、文様の細か

が、二層までははつきり残つてゐる。最も普通な型を踏んだもので、に入つた柱の模様や複雑なピラスターや

なピラスターの間々に神々の像を抱いた窩^{ニーシュ}を持ち、その下には象の大きな頭が飾られ、しかもこれら^{ニーシュ}の窩の二つ目毎に窓が明き、複雑な幾重もの窓枠の奥に瓢形の格子をはめられてゐる。その腰石も亦實に華やかな屈曲の巧みを極めたもの、屋根は雜草に蓋はれ盡くして見えない。中は空洞。苔草の長くのびたのが一面に生え擴がつてゐる。小川を渡つて東側に行く。小高い所に立つ最も大きな塔は、チャムの塔の原則に反し、川向ふの建物に向ひ合ふやうに正面入口を西に向けてゐる。

六世紀の建立にして美山中、否、チャムの遺蹟建築物中、最古のものといはれてゐるのに、極めてよく立殘つてゐる。一體にチャム建築のせ、こましく矮小なのに比べて、これは非常に豊かな感じ、壯大ともいふべきであらう。極めて完全な典型的な塔であるが、その背面、即ち東側にも西側と同じ玄關を有し、同じ扉を持つてゐるのが異數であ

る。中に這入つて見ると、外形の大きいだけに廣々として居り、東西に開けた兩入口からの光線が、常になくこの聖房を明るいものにしてゐる。この塔の傍らから發見されたといふこと、最古の碑文は、四世紀の末にバドラヅルマンによつて一塔の建てられたことを語つてゐるが、更にその附近から出たもう一基の碑は、シャムブヅルマンといふ七世紀初頭の王の建てたもので、その銘によれば、前の碑銘が語る所の塔が、恐らく木造であつたのであらう、火事にあつて焼失したものを、煉瓦を以て再建したとあり、パルマンチエ氏によればこの再建されたものこそこの塔だといふのである（註九）。この塔のすぐ周圍に立つてゐたといふ六基の小塔も、それら凡てを圍んでゐたといふ周壁も、その壁の入口を成してゐたといふ塔門も今や見當らない。たゞ北に隣つて些か主塔よりも小さい一塔あり、中にはリンガが置かれてゐる。又少し離

れて東南の方に二基、西南に二基、小塔が見える。

これらも同じ周壁の中につたものといふ。型の

如く彫の無い壁柱^{ピラスター}の凹凸によつて飾られた平凡な

ものであるが、入口の扉に相應する三方の擬扉が

窓となつてゐるのが極めて珍らしい。窓は之を厚

い石で十の字に仕切つてあるので光線の這入る空

間は極めて狭い。中を窺つて見ると正方形で、三

方の打抜かれた窓枠の深さによつて、今更の様に、

壁の厚さの甚だしいのにびつくりする。その他あ

ちこちに散在する塔には、僅かな徑らしいものさ

へ丈高い叢に埋もれて案内人さへ辟易の態を見せ

る。一九〇四年、バルマンチエ、カルポーによつ

て行はれた發掘以來、既に三十餘年。同年の極東

學院年報に現はれたバルマンチエの美山の記述に

比べて見る時、如何にこの僅かの間に自然の破壊

が行はれたかと想ひやられる。同論文に依れば、

こゝに在る五群れの建物は、各々周壁を持つてゐ

たといふのに、建築に對する専門眼の無い爲か、遂にそれらしいものを見出さなかつた。

この聖地は一八八五年、最初に宣教師ブルイエ

ールによつて認められ、同九十五年、パリによつ

て最初の開拓行はれ、九十九年にはフィノー、ラ・

ジョンキニール兩氏の踏査あり、一九〇四年に至

り、バルマンチエ、カルポー兩氏による徹底的な

開拓修理が行はれた。この努力によつて得た歴史

的考古學的收穫の豊富なりしことは云ふまでもな

く、フィノー氏はこゝから得た二十五件の碑文に

よつてペルグーニュ以後新たなチャンパ史の組立

を行つた。これらの建築物、碑、彫刻等を以てこ

の谷間を飾つた王達は、殘つてゐる碑文によれ

ば、インドラプラ王朝、パンダランガ朝、ヴィジ

ヤ朝と、四世紀から十二世紀にかけ、十餘人に

及んでゐる。さうして建物の跡の見出されたもの

六十八基、その中二十五基が立残つてゐたことに

なつてゐる。チャム族がこの地を去つて以來、安南人は甚だしい迷信的な恐怖に壓されて、此處を

全く虎と狼との跳梁にまかせてゐた。この發掘當時のシャルル・カルポーの日記は、如何に彼等安南人がこの地を怖れてゐたかを屢々語つてゐる。安南の苦力達は遠く山裾の村から日々通つて来て、どうしても山の中の、カルポー等の假住宅の傍には泊らなかつた。神像は更なり、塔の石や柱を動かすに當つても、いち／＼自分等は斯くせざるを得なくて止むなくするのであるから容して呉れといふ意味の祈りを繰り返した。偶然發見される古の寶物類、黃金の細工ものなども、彼等にあつては滅多にない現象であるが、殆んど紛失の惧れが無かつた(註十)。この淋しい山奥の谷間に散在する神殿、ましてそのほの暗い聖房の中に立つ神々の姿には、恐らく鬼氣せまるものがあつたであらう。

バンアン

再び道をかへして國道に出で、その平らかな道を十五糠、左に折れて二糠、憑安バンアンといふ處にて、道路の傍らの廣場の中に、これはまことに珍らしい八角形の塔。壁柱、擬扉、その他何らの裝飾もない極めて素朴な感じのいゝ塔である。玄關だけは方形であるが、異色としてはその側面が擬扉無くして正面入口と同様に明いてゐて、丁度西洋建築のポーチの感じである。塔の内部は外廊の八角形に添つて殆んど圓形を成し、中にリングガ在り、しかも灌奠臺無く、圓柱の臺石の上にいきなり置かれてゐる。その前に澤山に立てられた線香の中、今立てたばかりと見えて二三本、淡く煙を上げてゐる。このリングガは十世紀バドラヴァルマンによつて祀られたものといふが、今や安南人は不思議にも之をある女の神に擬して崇拜してゐる。その南

側に小さい傍塔あり。平凡な形で玄關も擬屏もついてゐるやうに見えるが、半面盡く榕樹の強い氣根に纏ひつかれ、入口も閉ざされて見えない。背面に廻つて見ると、その樹の根元に手のついた土瓶様のもの、瓶磕(ビンガオイ)又は路磕(ローガオイ)と稱して、例のベテル用の石灰の容器が壘々と積んである。これはこの樹に棒げられたものか、乃至は主塔内のリンガの女神に奉つたものかを明らかにしないが、これも安南人がそのままチャムの神を崇拜する例であらう。尙その東北面に更に小さい傍塔があつた由であるが、一九一七年頃に崩壊してしまつたさうである。

あるが、チャムの遺蹟としては見るべきものは無い。このチャムの古港は、首府がこの近處にあつた間、即ち二世紀から十世紀まで殷賑を極め、支那あたりとの交通の船の出入も繁かつたらしいといふのに、その名殘は大占海口(ダイチエンハイイウ)と呼ばれた古名に留まるばかりである。こゝから銀砂の道、フィラオの美しい林の中を十數糠にして蠟石山に達する。このフィラオといふのは、カジュアリナ樹の俗稱で、垂れ葉の松の如く、その叢立するや雅美類ひが無い。不毛に近いこの白砂を飾る唯一の樹木で、林務局近頃の事業らしく小さな苗木も多く認められた。

拔て、大理石山

(モシタニエド・マルブル)
と俗稱され、南支那海に臨んで砂原の中に聳えるこの岩山は六座に分れて立

国道に戻り、一糠後退して今度は右に折れる。

これ我が徳川時代初期に、茶屋、角屋の諸氏が活躍の跡たる會安への道、吾々には懐かしい土地で

怪奇な傳説に富み、洞や窟、六山を併せては百にもなるであらう所の大小の石室の中に、上は玉上皇帝、釋迦牟尼以下邪神魔神に至るまで、ありとあらゆる神像靈位を祀つてゐるといふ、云ふべくんば靈山である。さて、その中一番多く人の杖ひく水山トウイシンは山容最も大、最北にして最も海に接して立つ。峻崖峭々、如何にも近づき難く見えるが東の麓には、岩そのものに彫りつけられた階段あり、之を登つて數十段、尙高く續くのを東に外れて靈應寺ウントウといふ貧しげな小さな寺あり、その寺の背後石の扉の閉ざされたるあり。こゝから藏真洞ダンチオンドンと明命帝の銘じたといふ洞を訪れる。闇の廊下を暫く行つて第二の戸にぶつかり、之を出ると六七間四方もある一つの岩室に出る。その薄闇の石室の中にあるながら、左手の灰色の崖壁にそつて、何やら蔓性の植物が不思議な程青々と茂つてゐる。この室の右手よりに瓦葺の小廟が立つてゐる。中央

の座には「太上老君」といふ石像の道教神が坐つてゐるが、その右にそれよりも一層大きな漆塗りの像あり、天依阿那主ティエンイアナチュアと呼ばれる。果然ポー・ナガールのウマ神に與へられた安南名前に一致する。漆に塗り固められ、赤帛に蓋はれては、それと認める由もないが、この名前こそその出所の偽らざる證據である。

この石室の一一番奥には、深く高い岩の断層が三つも隣り合つて深い口を明けて居り、各々その中に小廟を抱へてゐる。その最右端の最も口の狭いのを覗くと、暗がりの中に、入口階段の上に置かれた巨石が見えるが、正しくチャムの彫刻である。先づチャム建築の壁柱ピラスクに續くべき深い凸凹と例のハート形のアーチを彫まれた腰石が見え、その上に方形の石が乗る。この石の中央には又方形の浅い凹みを仕切り、その中にバラモン將神ボラバランが戰鬪の様子で浮彫となつてゐる。この凹みの周囲は

凡て細緻な唐草文様を以て蓋はれてゐる。闇の中をなほ透かせば、これと全く同じ二段の石が左手にも見え、この両方の間は例の煉瓦で積んだ二三段の狭い階段らしきもので繋がれてゐる。左手の將神の浮彫は些か缺けて見えるが、右手のは完全である。この廟の神體はこの石の神體はこの石、否この將神(デラバ)なのであつて、他に神像らしきものは見えない。「ニ相石牌」と稱せられ、蠟燭や線香はこの浮彫に捧げられてゐるのだといふ。

尙チャムの遺蹟らしきものはその他主としてこの山の東側にあり、煉瓦の散在するものを多く見ることである。チャム族にとつて、この山を成してゐるところの蠟石は、その彫刻、建築の材とならなかつたものか、わざくこの奥まで巨石、煉瓦の類を運び込んでゐるところ、異様の感を打つものがある。

靈應寺の前から更に左手に上つて行くと、今度

は右手に外れて「望海臺」といふテラスあり。之が銘を記した明命帝十八年の碑あり、海を望めば白砂の丘を越えて南支那海の滄波茫茫たるところ東南の方にキニラオ・チャムの大きな島塊が煙つてゐる。傳説によれば、こゝにはチャム王の夏の宮殿があつたといふことであるが、數年前、極東學院の一員が發掘の目的で出かけて行つて、何らの得るところも無く、何らの跡も見られなかつたさうである。

さて、段を登り切れば少し庭が開け、フランジパニエの木の群れがその白っぽい骨のやうな枝を一面に張り擴げて無数の白い花が甘たるい重い香氣をふりまいしてゐる。その間に自然の門を象る通雲洞、靈岩洞などゝいふ奇岩怪洞。まこと支那の仙人圖に見るやう。右手の化嚴洞に入る。數間の闇のトンネルを抜け、仁王か四天王か恐ろしげな巨像の構へてゐる十數の階をおりると、ヒンヤリ

とする冷氣と共に廣々とした石室に出る。その周囲のあらゆる窓み、あらゆる斷層の口の中に蠟燭がゆらめいてそれゞゝの神を齊つてゐる。この石室の東の隅、闇の色殊に濃いところをいくらか進んで行くと、サツと射し入る光線に、見ればそこには更にく廣い石室が開けてゐるのだ。洞壁に、あるかなきかに傳ふ幾世紀間の滴水のためにあらうか、周壁悉く蒼然。少し開けた崖角から長く垂れ下つた榕樹の氣根と共に、淡い光線が真縁に射し入つて、身はさながら深い海底に在るの思ひである。こゝを玄空洞と呼ぶ。この室もその周圍に無數の斷層の孔を持ち、その悉くが神佛を納めて居り、尙室のあちこちには小さな祠が立つてゐる。その左の奥にあるのは婆玉妃の祠、それに對して右手の隅に在るのは婆來妃の祠で、この名こそその出のチヤムなることを語つてゐるのだ。

即ち婆玉は例の「天依阿那主玉」の略號である

いひ、婆來の來は「土から出る」の意で、チヤムの遺蹟を示すために屢々用ゐられる語であるといひ、共にチャム神像なることを語つてゐる譯である(註十二)。兩方とも生地は漆で塗り隠され、赤帛をかぶせられてゐるが、その坐り様の印度式であることは確かに思はれる。

こゝを西側へ抜け、切立つた峻しい裏階段を傳つて下山する。尚陰陽兩火山の間に占城チエンタンといふ處、即ちチャムの城砦の意を地名としてゐることろがある。確かに多く煉瓦の散在するものがあるといふ。再びフィラオの林の下道を抜けて八糸ばかり、ソン・ハン河を隔てゝツーラン市の對岸に出で、渡しに依つてツーランに入る。

ツーラン博文館

この町は早く一七八七年、窮追の身を佛國の庇護にすがつた嘉隆帝ジアロンが、ルイ十六世との間に調印

を了つて、佛國の居留地となつたが、其後明命^{ミンマン}、
同慶^{ドンカーニュ}の諸帝抗争を試み、結局一八八八年之を承認
せざるを得なくなつたといふ歴史を持つてゐる。

チャムの遺蹟は見えないが、此處にチャム博物館
があつて、チャムの造形藝術の凡てを集めてゐる。
聖房^{カラン}の神祕の薄闇から引つぱり出されて來た神々
の群れは、この明るい陳列室の中に事務的な秩序
の下に番號札を貼られて、今やあらゆる冒瀆的興
味の眼の前に晒されてゐる。こゝに神威はすつか
り剥ぎとられて、その或物は美術といふ意味の新
たな價値を得、その或者は單なる土俗の見本、單
なる史料として眺めらるゝに過ぎない。一通り見
て歩いて先づ感じることは、これらの作品の巧拙
優劣の甚だしい不同である。茶喬出土^{トラキュー}のシヴ神の
腕無し半身像^(n.11)、香果^{ホアンクワ}(廣南)の半身女神像
(n.3)等の力強く正確な鑿の跡は、ギリシャ彫刻
の神技を偲ばしむるものあり、美山齋來の孔雀の

上に乘つたスカンダの立像^(n.6)、多宜^{タイ}(廣治)美
徳^{デュック}(廣平)から來たギシニニの立像^(n.14)な
どの優雅な線の單純化は、近代泰西の名家も之を
惜しむであらう。その他茶喬のもので、館の入口
近く置かれた腰石に見える舞人の肢體の美しい運
動線。同じく館の庭前に置かれたリンガ臺石に現
はれた巧緻極まりなき群像の浮彫。これらはチャ
ンバと限らず、一般的評價して傑作と云ひ得るも
のと思はれる。然るにこれらに隣つて、稚拙、時
に醜怪にまで陥るデカダンスの色濃い多くの作品
が見られるのである。かゝる不均等の甚だしさは、
今まで見て歩いた建築などに於けるよりは、餘程
判然と現はれてゐるやうだ。しかし美山出土のガ
ネシャの立像などは、この民族の純眞な獨創性を
示すもので、作品そのものの優劣などを超えて、
何ともいへない微笑ましさを湧かせる。それにし
てもこの無味乾燥な陳列室よりも、あの叢の中の

それべの聖房に元通り納つてゐたら——といふ
淡い憾みを沁みべく覺える。この博物館出品物に
就いては、H. Parmentier: Les sculptures čames du
Musée de Tourane, Ars asiatica, t. IV, Paris, 1922
が出てゐる。

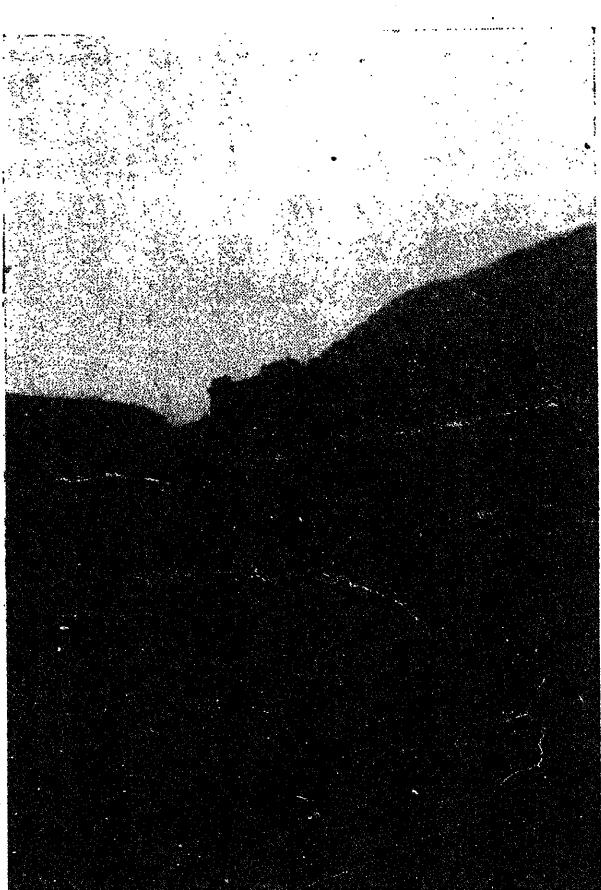
歸の聲

ツーランを出て愈々順化に向ふ。ツーランの瀉
性に添つて行くと間もなく^{デオヴ}雲、即ち雲の峰（コ
ル・ド・リュアージュ）にかかる。登るに従つて白
雲の去來する峰々が今や目近く迫つて來るかと思
ふほどなく、やがて身はその雲の中に這入つて行
くのだ。峰のうねりを縫つて幾度か曲る度に、ツ
ーランの海の靜かな眺めが消えたり現はれたりす
る。やがて^{クワンナム}廣南と^{テュアティエン}承天の兩省を境ひする標木が
見え、右手に高く築かれた關門が現はれる。この
昇り九糠で、こゝが頂上、海拔五百米といふ。門

チャムの古塔を訪ねて（ガスペルドス）

には海雲關といふ額あり、明命帝の築かしものと
いふ。車を停め、崖を攀じて門の下に行く。中に
碑あり、啓定十七年のもの。赤鑄びた大砲が三個
並ぶ。明命五年のもの一個、七年のもの二個、佛
國の居留地として調印成りしツーランをば、むさ
へ渡すまゝとしての空しかりし抗爭の名殘であ
る。この門に續く砦の上に上れば、南にはツーラ

第十三圖 海雲關



シの海、蠟石山の影愈々濃やかに、廣いラギューンの静けさを抱いて遠く延び、北にはラン・コウのラギューン飽くまで穩かに、汀の波の數も讀まるゝばかり。向ふ側の岬の鼻に一團の白雲が載つてゐて動かない。美しい眺めだ。更に草に蓋はれたこの狭い危い砦の上を傳つて行くと、もう一段高い關門の屋上に出る。眺望飽くことなし。砦の上から下の崖へかけて、淡紅の野生の鳳仙花が一面に咲き亂れ、その間には野生のカンナが小さい乍ら濃い紅炎を吐いてゐる。葉形奇なる蘭科の種々なるもの、黃色い朝顔様の蔓性の花など生ひまつはる。これより降り道九糠。曲り曲る角の岩間に毎に、清水の流れが鮮かに白い。白砂の丘、林、森、更に隘雲山^{アイサン}の峠の迂りを上下し、尙小さな峠を三つ越えてやうやく順化に入る。

順化の在る承天省^{チエアテイエイ}以北には、チャムの遺蹟は次第に稀薄となり、カオハイのラギューンの入口にある靈泰^{リントイ}の塔を、塔としての最北、即ち最後のもとのとする。順化で最も注目すべきは、この郊外、國道から香河（フルーヴ・ド・バルファン）に添つて六糠溯つたところに明らかに殘つてゐるといふ林邑時代の城砦、區粟の跡である。

その北の廣治^{クワントリ}、廣平^{クワントン}の二省には尙各々二十點位づゝの遺蹟の認めらるゝものがありとはいへ、殊に廣平に至つては早く十一世紀の末に安南に渡されてしまつてゐるので、その名残も極めて淡いものである。たゞ昔時チャム領域の最北端を示す城址が洞海^{ドンガイ}のあたりに見え、安南人等は之を甘露城^{ダンローダン}（チャムの城）とよんでゐるさうである（註十二）。順化以北のこれらのは、筆者不幸にして訪ねることが出来なかつた。見て廻つたチャムの遺蹟も、之だけを目的の旅でなかつたので、先を急が

れて充分な観察が出来なかつた。勿論割愛のやむを得ざりしものの多かつたのは殘念であつた。

チャムの遺蹟と安南人

民族的争鬭の血腥きもの十餘世紀を経、相互に慘忍な殺戮、劫掠、焼打ちなどの歴史を繰返しながら、しかも尙その割合に遺蹟の多く見られる所以のものは、實に安南人のチャム族に對する宗教的恐怖である。見よ、殘つてゐるものは凡て宗教關係の建築彫刻だけである。チャム族が煉瓦といふ比較的耐久力有る材料を用ゐたのは、必ずしも寺院乃至城砦に限らなかつたであらう。然るに王宮などの跡の見ゆるもの全く無く、區栗^{クヌス}、闇槻^{チャバン}以下の城砦は、僅かに幽かな跡を辿り得るに過ぎない。之に比べる時、宗教建築の殘存狀態は實に完全といつてもいいと思はれる。

蓋し安南人程臆病で迷信的な人種は少いやう

チャムの古塔を訪ねて（ガスパルドヌ）

だ。安南人の宗教なるものは、その先祖や偉人や勇士への祭祀を措いては、悉く迷信的なものと言ふも過言ではないと思ふ。何故なら、彼等にとつては善にせよ惡にせよ超自然の能力のありさうなものは凡て神なのだから。禍ひをする神は之を宥めるため、福を授ける神には福を下さるよう祭るのだといふ。何らかの偶然によつて靈力ありと認められ、又は傳へられた時は、路傍の石礫樹木も神である。されば彼等の有する佛も道も儒も、一部の極めて少數の有識者は知らず、一般にはその隣邦人が崇拜するが故に靈力がありさうなものだと思ひ、その故に彼等も崇拜するのであつて、所詮彼等の五行の神、土の神、川の神、乃至靈樹や靈石の類と選ぶ所は無いのである。何ぞチャム族の遺したブラーーマンの神々がその例に洩れようや。彼等がこれらの中々をそのまま信仰するも何らの不思議は無いのである。

又、かの鬼氣に充てる美山の神祕境や、その他
の古塔の寂然たる姿には、幾世傳襲の猛り立つた
敵愾心も薄氣味悪さにうちひるんだであらう。勿
論戰陣にあつては、勢ひに特んで奪略の價値ある
ものは盡く之を奪つたが、さて平時に返つた時、
良民等はたゞ怖れを感ずるばかりであつた。恨を
呑んで死んで行つたチャム族の幽魂が復讐に出て
来るといふ思想は、一般的に深く信せられてゐて、
彼等の信ずる天地間無數の惡靈中、特に魔亥マホイと呼
んで恐れること最も甚だしい。故にチャムの遺蹟
の見える處、必ず之を *dany* (安南土俗研究家カデ
ィエール師によれば「聖」を意味するチャム語 *yāñ*^{ヤン})¹といふ特別な語を附
から來たものならんといふ。)といふ特別な語を附
して敬遠し、その遺靈を鎮めるためにその傍らに
廟を築くのが例であり、何か偶然の凶事でもあれ
ばその場所を *cām* (禁)、即ち禁斷の場所として近
寄らない。例へばツーランの現在博物館のある地

域は、この禁斷の場所であつたといふ。まだ館が設
立される以前、その庭に無秩序に並べてあつたチ
ャムの諸神や怪動物の像が、夜な夜な惡靈となつ
て現はれると信じられてゐたといふ(註十三)。既に
その聖房から引出されて來た、いはゞ美術考古の
標本物たらんとしてゐるものに、尙彼等はその迷
信的な恐怖を覺えてゐたといふのである。されば
こそ、筆者の訪ねて歩いた遺蹟にして、そのまゝ安
南人の崇拜に移つてゐるものは扱て措き、その傍
らに安南廟の無いところは殆んど無く、又は美山、
桐陽の如く全然禁斷の形となつてゐるものを見た
のも偶然ではなかつたのである。安南人の迷信と
チャムの遺蹟とは、かくて奇妙な結合をしてゐる
わけである。(完)

(註 I) Cabaton : Nouvelles recherches sur les Chams, Paris,
1901, p. 18.

(註 II) Durand : Notes sur les Chams, B.E.F.E.O.V., p. 368.

- (■■II) Aymonier : Les Tchames et leurs religions, Paris, 1891, p. 18.
- (■■III) Cabaton : Supra, p. 52.
- (■■IV) Đao-Thái-Hánh : Histoire de la déesse Thiên-V-A-Nă Bulletin des amis du vieux Hué, 1914, p. 164.
- (■■V) Cabaton : Supra, p. 17.
- (■■VI) 道泰韓 : 天恩女神傳記
- (■■VII) Claeys : Archéologie indo-chinoise, Extrême-Asie n°89, 1934.
- (■■VIII) Parmentier : Les monuments du cirque de Mî'sôn,

B. E. F. E. O. IV, 805.

- (■■+I) Charles Carpeaux : Les ruines d'Angkor, de Dong-duong et de Mî-son, Paris, 1808.
- (■■+II) Dr. Sallet : Souvenirs chams dans le folk-lore et les croyances annamites du Quang-nam, Bulletin des amis du vieux Hué, Hué, 1923, p. 213.
- (■■+III) Parmentier : Inventaire des monuments éams p. 542.
- Dr. Sallet : Supra.